

「かじかの郷」を探しあてた喜び

アラブ首長国連邦のドバイというところに住んで6年、日本を長い間離れていると日本の良い所、悪い所が日本に在住していた時よりも、より多く明快に感じられる。



私が住んでいる中東ドバイは高さで機能美を追求したビル群、24時間365日空調が効いた、巨大なショッピングモール、世界各国の人が集まる大きな街で、色々な文化、言葉が交わっている、黒人、白人、黄色人種と世界を集約したような街にも思える。



マルチカルチャーとしてグローバルな感覚を補う事ができ、また各国の人が集まるので中東を拠点としてのヨーロッパ、アフリカ、アジアにも視野を広げるビジネスを展開する事もできる。

そんな国に住みながら6年、日本に帰国して生活の拠点をつくるのなら田舎が良いなとぼんやり考えていた。

その理由としての一つ目は、移り変わる四季

四季がない国ではのっぺりと一年間が過ぎてしまうので、去年の冬はあんな事があったなあと鮮明に思い出せない、何年か前の記憶と一緒にあってあいまいになってしまう時がある。

四季は記憶、生活をくっきりと浮かび上がらせる、その四季をもっとも鮮やかに感じさせてくれるのが田舎だと思っている。



二つ目は、情報の遮断

私自身情報は生きていく上でとても大切な物だと思います。現実「かじかの郷」があるという情報を手に入れる事ができたので現在住む事ができたのです。

今は携帯、パソコンがあれば様々な情報を簡単に入手できますが、情報が氾濫して、選択したり、吟味したりするのが難しくなったり、情報自体が飽和したり、日本の都市部ではその情報自体が向こうからやってきてその情報をすべて鵜呑みにしたり、惑わされたりして前に進めなくなってしまう病になったりする人がいます。

ここまで情報があふれてくると情報を遮断するという事が必要になると私は思います。

上手に表現するのは難しいのですが、田舎に住む事により自然な形で情報の遮断ができると思い、子供を育てるのには良い場所ではないかと思いました。



三つ目は、地域住民との関わりが、都市部よりも密になっているなあと感じていたからです。

やはり人間が生きていくうえで、必要なものは人とのコミュニケーションだと私自身感じております。都市部ではあまりなくなった隣人等のコミュニケーション、地域へ積極的なアプローチをして住むだけではなく、街の住人としての喜びや苦勞が田舎では味わえるだろうと思いました。

田舎ぐらしの課題としては収入をどのように確保していくかだが、今回、「かじかの郷」体験古民家で暮らしてみて、地域を見て、可能性を探る事ができると思っています。

頭の中で妄想してみても、想像は想像だけにとどまり現実化する事はありません。

実際に住んでみる事ができる、体験してその先の行動を見定める事ができるということでも「かじかの郷」体験古民家での滞在は私たち家族にとってとてもありがたいものだと感謝しております。